

原始

第1章 日本文化のあけぼの 2. 農耕社会の成立 (1) 弥生人の生活

あおやかみじち  
戦いを物語る青谷上寺地遺跡



殺傷痕跡人骨（頭蓋骨）★



銅鏃が刺さった腰の骨★



木製盾★



人骨出土状況★

(写真は、いずれも青谷かみじち史跡公園準備室蔵)

「魏志」倭人伝  
：其の国、本亦男子を以て王と為す。住まること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為す。名を卑弥呼と曰ふ。鬼道を事とし、能く衆を惑はす。

『後漢書』東夷伝  
建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜ふに印綬を以てす。安帝の永初元年、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願ふ。桓靈の間、倭国大いに乱れ、更相攻伐して曆年主なし。

解説

■弥生時代から、本格的な戦いは起こった。

考古学からは、日本で初めて弥生時代に戦争が起きたと考えられている(佐原 2002)。「考古学的事実によって認めることの出来る多数の殺傷をともしないという集団間の武力衝突」を戦争の定義とし、その証拠として「A 守りの村、B 武器、C 殺傷されたあとを留める人骨、D 武器の副葬、E 武器形祭器、F 戦士・戦争場面の造形」を考古学的事実としてあげている。また、中国の歴史書「後漢書東夷伝」「魏志倭人伝」には、2世紀後半に倭国で戦いがあったことが記されている。

■青谷上寺地遺跡から出土した傷付いた人骨

青谷上寺地遺跡\*(鳥取市)の溝状遺構 SD38(SDとは溝の記号)からは、約5300点、約110体分の人骨が出土し、そのうち約10体分に切り傷や刺し傷といった殺傷痕のある人骨が発見されている。その中には腰の骨に、銅鏃が突き刺さったままのもも出土し、国内で初めて銅鏃が武器として使用されたことも証明された。SD38の溝は3段階の変遷があり、人骨は2段階目に残されたものと判断されている。土器の型式からおおよそ2世紀後半の時期に該当すると考えられている。2世紀後半は、中国の歴史書に書かれる倭国の戦いの時期と重なることから、その戦いとの関係性が注目されている。

\*青谷上寺地遺跡…鳥取県鳥取市の西端に位置し、青谷町を流れる日置川と勝部川の合流地点にある。弥生時代前期の終わり頃(紀元前3世紀頃)から集落が形成され、集落の終焉は古墳時代初頭頃(3世紀後半)と考えられる。様々な物資が行き交う交易の拠点であったことから「港湾集落」といわれている。

(担当：吉田 学)

参考資料

- ・佐原 真「弥生時代の戦争」(『古代を考える 稲・金属・戦争』)(吉川弘文館 2002年)
- ・財団法人鳥取県教育文化財団『青谷上寺地遺跡 4』(2002年)
- ・鳥取県埋蔵文化財センター『鳥取県の考古学 第3巻 弥生時代II』(2007年)
- ・鳥取県埋蔵文化財センター『弥生の港湾集落 青谷上寺地遺跡』(2017年)

★の写真及び図は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。